

スタートアップなどの創造事業の成功確率を高めるためのプロジェクトマネジメント研究



【中野キャンパス】人文社会学部 経営学科 経営コース 教授

植村 眞司 Uemura Shinji

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード : 事業創造・プロジェクトマネジメント・PMBOK ガイドライン・アジャイル



研究の概要

SDGs 目標 8 : 働きがいも経済成長も

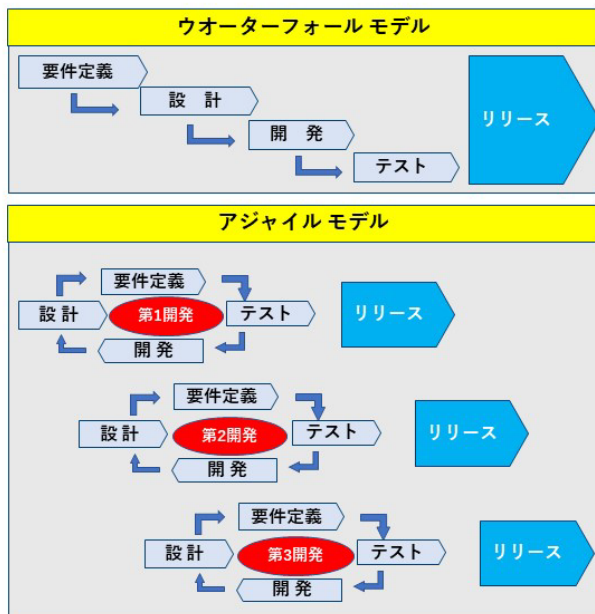
SDGs 目標 9 : 産業と技術革新の基盤をつくろう

「成功にこだわった」スタートアップの考えを推し進めると、スタートアップの事業創造としての本質が見えてくる一私は総合商社時代の実験の経験からそのように考えた。これは、スタートアップがこれまでの起業研究における通説ともいえるべき「多産多死型」ではなく、「多産少死型」の事業創造であるべきことを意味している。すなわち、スタートアップはベンチャーの語源である“チャレンジング”な精神と発想とは異なり、「最も成功にこだわった」事業創造であると考えられるが、それはスタートアップが社会課題の解決を果たす使命を帯びた事業創造だからである。

そのための方法論研究としては、人的動機づけの観点から「アントレプレナーシップ」があるが、本研究では、計画・組織行動、リスク管理、プロセス最適化の観点から「プロジェクトマネジメント」と、そのフレームワークである「アジャイル」をその対象とする。アジャイルは、“プロジェクトをスプリントと呼ばれる短期に分割し、その範囲で可能な機能を優先順に開発する手法であり（中略）柔軟に全体へ反映してゆくが、要求されるものや最善策は途なかで変化することを前提にした、現代的な開発モデル”であり（*¹）、本研究ではこれをスタートアップに活かすための実装検証をおこなう。

（*¹）野中郁次郎「アジャイルとスクラムから考える開発と経営」（一般社団法人行政情報システム研究所 2020 年 4 月号）

（図表）プロジェクトマネジメントの管理手法



（図表）教員が作成

【関連論文・学会報告】

【学会論文】

「グローバル・スタートアップビジネスとプロジェクトマネジメント」単著/2024 年 10 月/国際商取引学会年報 2024 年第 26 号

【学会報告】

- ① 「日本版 IR（統合型リゾート）推進と法に関する考察」 2024 年 9 月/国際取引法学会中間プログラム（国際通商・投資法制部会）
- ② 「暗号資産紛争処理における新たな国際裁判管轄類型の必要性和制度設計に関する考察」 2026 年 3 月/国際取引法学会全国大会（国際取引紛争解決法制部会）

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

システム開発の分野で最近よく耳にする「アジャイル」は、小さい失敗と、後戻りをショートタームで繰り返すことで、比較的大きな成果をもたらすプロジェクトマネジメントのフレームワークであり、大企業が採用するウォーターフォール型（*²）のフレームワークに比べ、中堅規模または地方創生を目指す企業にとってより有効なプロジェクト推進手法であるといえる。

本研究の成果は、不確実性の高いビジネス環境（VUCA）への適応力が強く求められる時代の中で、スタートアップによる新規事業の創出を模索する企業に対する支援と協力につなげることが可能である。

（*²）開発は上記図表のように、左斜め上から右斜め下へと“一方向”のみに向け、時間をかけて慎重に進められる